

representative (*Kyōto rusui yaku*) not only served as manager of the mansion, but his job was also to assure that students sent to Kyoto by their lord were introduced to the right teachers, and to send up-to-the-minute cultural information back to the home domain.

The reverse flow of material culture, from local areas to Edo, was no doubt much smaller in volume, but all daimyo made gifts to the shogun and his officials, as well as their peers, of local speciality products, like the Odo ceramic ware of Tosa. The alternate attendance, then, became a mechanism by which these goods were centralized in Edo and later, no doubt, found their way back to other domains. There are also examples of branches of provincial temples that were established in the big city of Edo.

Lastly, the one example of material culture being diffused from local area to local area without going through the center involves a type of Tosa tea known as *goishicha*, which makes a brew with a much stronger taste than the oolong variety. This local tea spread along the Tosa lord's travel route across Shikoku during the early eighteenth century. Merchants from Nio (Iyo province) in northern Shikoku discovered this product and paid for special rights to market it in the Inland Sea area, where they sold it as Nio tea, which is still popular in that area (but not in Tosa).

中上健次の三篇の短編における暴力、^{ジェンダー}性差、セクシュアリティ

リヴィア・ロディカ・モネ (モントリオール大学)
Livia R. MONNET

本論文は、中上健次の三つの短編小説、「不死」(1980年『熊野集』に所収)、「重力の都」(1981年、1988年『重力の都』に所収)、「カナナカムイの翼」(1982年、同年『千年の愉楽』に所収)にみる暴力、ジェンダー、セクシュアリティの表現、描写を検討するものである。本論の分析の指標とする理論的仮説は、ナンシー・アームストロング、レオナルド・テネンハウス、テレサ・デロレタスの仮説——暴力とジェンダーは描写、表現において結集する、表現上又はレトリカルな暴力(テキスト中の暴力)とテキストによる、テキストを通して行使される思想的な暴力をテキスト中で判別することは不可能——である。

「不死」

被慈利と落人伝説から舞い降りた美女の束の間の出会いを物語る「不死」は、被慈利或いは同様の聖職者にまつわる口承や伝説を書き改めようとする意欲的な作品だ。多様な叙述、表現描写を通して聖にまつわる伝説の書き直しが行われる。例えば物語の主人公被慈利は、不在、無為の空間の象徴、テキスト上存在理由を完全に欠く幻として描かれる。又、インターテクスチュアルな暴力も見られる。その例としては、泉花境の『高野聖』の文字どおりの冒瀆、落人伝説、羽衣

伝説、その他の民話伝説、民俗芸能からの極度な流用、書き直しをあげることができる。さらに、このテキストは、中世日本における聖の歴史的行為とその意義、機能を脱構築する。被慈利（五重来『高野聖』）の世俗性が歪んだ異様な形で浮き彫りにされる一方、被慈利にまつわる行為——例えば説教、苦行、厄除け、病の治癒——は、まやかし、無意味で冗長な行為として描かれる。

こうした聖にまつわる様々な伝統の暴力的な脱構築は、テキスト中の二つの目的にかなっているように思われる。一つは、聖の歴史と存在条件にまつわる極めて重要な二重構造（アンビバレンス）の指摘だ。この二重構造から差異、他者性、暴力が生まれ、永続する。テキスト中に表現された暴力と差別を継承することによって被慈利自身の排除と差別化が行われる。聖伝統の読み直しによって「不死」が明らかにしたもう一つの点は、民間信仰における救いに関するものだ。救いはここでは女性の身体とセクシュアリティに密接なものであるばかりでなく、卑しいもの、究極的に不可能なものとして表現される。フェミニスト批評家にとって救いを卑屈^{アブジェクション}、不可能と表現する中上のテキストの最も問題な点は、女性の身体の強姦と殺りくだ。本短編にみられる女に対する性的虐待、破壊のもとには、女性の差異に対する男性の悔恨があるように思われる。「不死」が想定する救い、自然、言説^{コトバ}、物語の起源などを女に還元することによって被慈利はあたかも復讐を行うかのようだ。

以上から明らかなのは、「不死」がデロレタスの論点「言説には暴力が内在し、暴力には性的差異が存在する。」の格好の実例を示しているということだ。本作品の他の場面では、暴力が耐え難い政治的姿勢にまで達する。こうした姿勢は、まやかし、幻、不在として実現される男性性／男性中心主義、女性や女体、そのセクシュアリティの描写にではなく（これとは反対に男性中心主義の特権的地位の脱構築は、相当有効といえる）、強姦を中心的出来事として前面に出すテキストに表われている。「不死」が被慈利と子どもの手をした女性との間の暴力的な遭遇を巡って構築されている点に疑いはない。即ち、テキストで問題とされているのは、強姦なのである。「不死」にみる大半のディスクリールの誇張されたフェティッシュな表現（女性としての民間信仰の救い、まやかしとしての男性性、虚飾としての聖の歴史）を通して、強姦は芸術、想像力、宗教、文化、そして自然秩序の中心的出来事となる。更に、典型的ポストモダンのテキストである「不死」は、強姦がポストモダン文化の基盤を成すと想定しているように思われる。リン・ヒギンスはアラン・ルネの映画「去年マリエンバードで」に関する論文で、メタフィクショナルなポストモダンのテキストでは強姦の描写は不可能である、これらのテキストは強姦を認識することを拒絶、隠蔽することに依存する、と主張する（“Screen/Memory,” 316）。「不死」は、強姦の描写に凝り、強姦を叙述の中心に据える一方で、「マリエンバード」を始め他のポストモダンのテキスト同様、強姦を性的快楽、耽美的鑑賞、神話や幻想への招きといったものへと言換えるのである。いうまでもなくこうした言換は、小説中（そして小説外）の強姦の犠牲者から、強姦を強姦として語る権利を奪う。

強姦を魅惑的な耽美的経験に書き換えることによって、不在、幻、まがいものとして想定される父権的男性中心主義や女性の描写における不平等が明らかになる。男性中心主義がその終焉の不安を抱きつつも、権力を保ち続けるのに対して、女性は、情欲にみなぎる女陰としてだけ、或いは自分自身に加えられる暴行への挑発としてだけ存在するかのよう描かれる。従って「不死」

から明らかになるのは、題名の不死が意味するのは、子どもの手をした女でも、彼女の属する神話的な世界でもなく、もはやアブジェクションとしてみしか存在できない輝かしい男性性である。日本の幾人かの男性評論家による最近の中上作品世界に関する指摘とは反対に、本作品の女性描写にみられる暴力は、テキストの枠を超えて一般社会にまで働きかける力を持つのである。

「重力の都」

若い労働者由明と不明の貴い御方の霊にとり憑かれているらしい若い女性との関係を描く本作品は、「不死」同様、暴力的である。確かに、この暴力の激しさは、中上の物語の定義のひとつ、「切って血の出る物語」の実例としてこの作品を書いたのではないかと思いたくなるほどだ。又、『重力の都』に収められた全ての小説と共通するのは、本小説が谷崎の『春琴抄』の書き直しを意図していることだ。由明は佐助、そして由明と関係を持つ若い女性巫女はやや特殊な春琴と容易にみなすことができる。更に、「重力」は明らかに近代／前近代の区分によって構成されているが、これは『春琴抄』の影響のみでなく、作中の幻想力によるものでもあると思われる。

一時的な日雇労働と山中の生活に対する由明の思考に浸透しているのは、アンビバレンスと耽美主義の二重の傾向であり、ここからアンビバレントな近代日本像が生み出される。この日本社会の投影にとって、近代社会の基盤となった下層民、日雇労働者は、単なる模倣、或いは偽造として描かれ、あたかも存在しなかったかのようにみなされる。しかし、こうした労働、搾取、差別を否定する見方の一方で、これらの存在は厳然たる事実であり、しかもこれは『春琴抄』に描かれる前近代的労働関係に見られるものと同様のもののように思われる。この点で興味深いのは中上の他のテキスト（『地の果て至上の時』『奇蹟』）と異なり、「重力」では国家権力の問直し、マイノリティの排除、差別への批判をする力が日雇労働という観念には与えられていないことだ。由明が接するダム・トンネル工事に携わる日雇労働者の集団は、女性不在の男性同士の社会の性欲や願望に支えられたいわゆる“想像の共同体”のように描かれる。この“想像の共同体”は近代国民国家の暴力、支配、阻害の機能をパロディー化するばかりでなく、それを保護する役割を果たすように見える。

更に、「重力」では由明と若い女性を苛む御人の亡霊との間に結ばれた同性愛的な暗黙の誓——その土台は男性の日常生活のあらゆる活動にともなう性欲・欲望の超越的な不尽の潮流にある——を想定しているように思われる。こうしたナルシスティックな潮流は、女性を「ひどくされることを待ち望み、腫れ、熱を持」った女陰以外のものと見ることは不可能であり、ましてや自律した女性のセクシュアリティ、主体性、主観性、精神の現実を認識することが不可能なのは言うまでもない。『葬儀』に見る男性同性愛に対するジュネの視点と驚くほど似たやり方で「重力」の底知れず孤独、かつ超越的な男性性／男性中心主義の欲望は、差異を同化し、性交を唯一のコミュニケーションの可能性と認識することに至る。言うまでもなく、この欲望・性欲は、近代／前近代を構成し、言説の意味全てを支配する。

上述した男性欲望観と歩調を合わせるように、若い巫女は、性欲過剰の半ニンフォマニアとして好都合に変形され、彼女の身体は暴行、強姦、乗り移りをマゾヒズム的に要求し、享樂するように描かれる。このようなエクリチュールの政治学の結果として、女性による巫俗イチはマゾヒズムの性欲と倒錯とひとしいものと化し、同時にシャーマニズムの歴史的価値、機能を空洞化する

る。巫俗・シャーマニズムを不必要な時代錯誤とみなすこうした叙述的戦略によって問題となるのは、作中の二つの明晰な言説にみる批判的な可能性を葬りさることだ。その一つは、盲目の巫女イチの差別に関するもの（更に暗にほめかされているのは、シャーマニズム一般と盲目を怖るべき他者性とする差別）、もう一つはシャーマニズムに於ける、或いはシャーマニズムの歴史や機能を通しての女性に対する暴力に関するものだ。

女性に対する過酷な表現上の暴力は「重力」に固有するものでないことは言うまでもないが（実のところ女性に対する暴力は、トマス・ピンチョン、ジョン・バース、ロブ・グリエ、サルモン・ラシュディらポストモダン派の男性作家に見られる一貫した特徴のように思われる）、中上は何故そうした選択をするのかという問に答えるのは容易ではない。「不死」や中上の他の小説に関連するこの問は、近／現代日本における権力行使抑制の為の手段としての文学／政治のディスクールの発達と関係があると思われる。そしてこうした歴史的過程は今後の重大な研究課題の一つである。

「カンナカムイの翼」

この短編は本論文で取り上げている三作品中、最も実践的で、かつ唯一部落民と少数民族差別の問題に直接取り組む作品だ。ここで見られるのは、物語の創造の過程を露呈するのみでなく、テキストを絶えずパロディ化、その信疑を問題とするメタフィクショナルな暴力だ。マイノリティの差別と抑圧の描写によって、単一民族日本の文化やそのアイデンティティーに対して疑問が投げかけられる。（アイヌ、部落民、「標準的」日本人アイデンティティーの故意の混乱）更に興味深いのは、物語の起源が相変わらず女にあること、物語が作家／語部とその語り、そして読者との間の近親相姦の愛ととらえられていること、そして物語の執筆・口承がオリウノオバの達男への思い入れに象徴されている点だ。しかし、こうした見方はこの作中の物語／叙述の権威を問う戦略によって、すぐさま解体される。

「不死」「重力」と同様、「カンナカムイの翼」の女性のセクシュアリティや主体性の描写には問題がある。オリウノオバの抱く日本の新しい理想郷の夢——部落民、アイヌ、その他マイノリティの同盟力で支配文化が破壊され、その廃虚に築かれた新しい日本国家の夢——とは、男性中心的ユートピアである。しかもその中心を成す革命は、女の身体の上で行われるが、女性がこの革命に参加することは不可能とされている。更に「カンナカムイ」の幻想的な要素（半分神、半分人間として描かれる達男とそのアイヌの仲間）は、差別され、抑圧された者たちの復讐の論理を強調すると同時に、それを無効とする。抑圧の民の救済は延期され、神話的でとらえどころのない救済者像の意志に服従させられるようである。

【参考文献】

- 1) Armstrong, Nancy and Leonard Tennenhouse. "Introduction: Representing Violence or How the West was Won." in Armstrong and Tennenhouse, eds. *The Violence of Representation: Literature and the History of Violence*. London and New York: Routledge, 1989, pp. 1-26.
- 2) De Lauretis, Teresa. "The Violence of Rhetoric: Considerations on Representation and Gender." in Armstrong and Tennenhouse, pp. 239-258.
- 3) 五重来『高野聖』、角川書店、1975。
- 4) Higgins, Lynn A. "Screen/Memory: Rape and its Alibis in *Last Year at Marienbad*." In Lynn A.

Higgins and Brenda R. Silver, eds. Rape and Representation. New York: Columbia University Press, 1991.

- 5) Genet, Jean. *Pompes funebres*. Paris Gallimard, 1953. English trans. *Funeral Rites*. Trans. Brenard Frechtman. New York: Grove, 1969.

LITERATURE AND HISTORY

Japan's Recent Historical Experience (1920-1970)

Through the Sequence of Kawabata Yasunari's Narrative

Jaime BARRERA PARRA

University of Los Andes

Literary narrative and fiction can be explored as an expression of the historical experience of a community. Such expression is artistic, ethical, explanatory, apologetic and prophetic.

The sequence of fictions written by the 1968 Nobel Prize Kawabata Yasunari have the suggestive appeal of following a very important period of Japan modern history. *Juurokusai no nikki* and *Izu no odoriko* were published during a very important decade of social transformation and intellectual ferment. *Yukiguni* first appeared in the mist of a political upheaval and international transformation of the country. *Meijin* is considered by many as a coded commentary on the Japanese game in the Pacific War. *Saikonsha*, *Senbazuru*, *Yama no oto*, *Maihime* and *Mizuumi* were serialized or printed during the years following the defeat of the Second World War and marking the beginning of the reconstruction of the country. *Nemureru bijo*, *Koto*, *Utsukushisa to kanashimi to* and *Kataude* run paralel to the events that preceded the emergence of Japan as an economic superpower. Kawabata Yasunari died (April 16, 1972) just in the moment in which the country was hailed to enter into a new era of admiration, prestige and growing important within the world order. The sequence of Kawabata's stories as well as many other short stories or essays, can be considered to be totally absent and detached from the events of one of the most excruciating times of Japanese historical experience.

Or they can be taken as a very special expression of a deep statement on what was going forward in the heart of the Japanese community. As a matter of fact historians do not pay any particular attention to Kawabata's narrative as a document related to Japanese nationalism or national spirit. Furthermore literary critics would praise generally Kawabata for his subtle sensitivity and aesthetic quality of his prose, but they would not go further to explain the